

漆と磁器のコンビネーション（その2）

長崎のやきものと漆～長与焼・亀山焼・三川内焼～

前回は、幕末から明治に日本各地の陶磁器産地で、漆塗りが施された作品が作られたことに触れ、漆を用いて浦島太郎が表現された有田焼の大皿をご紹介しました。今回は長崎で焼かれたやきものと漆のコンビネーションについてお話ししたいと思います。

長崎県内では、江戸時代から磁器が各地で焼成されましたが、その中で長与焼、亀山焼、三川内焼に漆で装飾された作品が見られます。

長与焼では、高級品の中に漆で装飾された例があり、特に三彩と併用される場合が目立ちます。図版1の長与三彩の鉢も、三彩釉と漆の素晴らしい組み合わせが見られます。三彩釉より下に当たる、鉢の腰から高台にかけての部分に朱色の漆が塗られ、金砂子が蒔かれています。漆による装飾によって、透明感のある釉薬の色合いが引き立てられ、いっそう雅な印象の作品に仕上がっています。

亀山焼では、いろんなタイプの装飾が見られます。図版2は、磁器製の硯箱に見えますが、中を開けると黒漆が塗られています。（図版2・3）一方、松葉が螺鈿細工で表現された塗り物の蓋物では、外観が漆器ですが、内側が磁器の白い素地と染付になっているという例などがあります（図版4）。

三川内焼は、国内向けや輸出向けの製品に漆が施された例があります。図版5は、外側は普通の漆器の蓋付椀のようですが、中を開けると根引きの松が染付で表された磁器製の碗であるというものです。

長崎では、このように磁器と漆器の両方の特徴を楽しめる、工夫に満ちた工芸品が江戸から明治時代にかけて作られていました。

長崎県文化振興課 松下久子



(図版 1) 三彩漆手金彩鉢 長与焼 18 世紀末-19 世紀初 長崎歴史文化博物館蔵



(図版 2) 染付黒漆塗山水絵方箱 亀山焼
1812-1865 年代 長崎歴史文化博物館



(図版 3) 同 内側



(図版 4) 青貝入漆塗五段重 亀山焼 天保 2 年(1831)頃 長崎歴史文化博物館蔵



(図版 5) 雲鶴蒔絵染付水草文蓋付碗 19 世紀中頃 (野田敏雄『魅惑の古平戸焼』創樹社美術出版 1993 年 110 頁より転載)